
霸道を進みし勇者の世界救済

GeNSO_

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霸道を進みし勇者の世界救済

【Zコード】

Z68460

【作者名】

GeNZO

【あらすじ】

穴に落ちたと思ったたら落ちた先はなんと異世界！？しかも「世界を救ってくれ」だと？いやいや無理だから、つかダルいしねただの高校生だった春原すのはじ 彰人が世界を救う！？そんな感じの物語

プロローグ（前書き）

小説初投稿ですがよろしくお願いします

誤字、脱字ありましたらご報告をお願いいたいます

プロローグ

「盟約を誓いし魂よ、古の契約に従い我の下へ顯現せよ……」

「ん？（氣のせい…………なのか？今、人の声がしたよつた氣が…）」

「ま、俺には別に関係無いか（なんか、呼ばれてるよつた氣がしたけど、気にしないでいいか）…………って、あれ？え！ちょ！？ウソオ！！地面がなくなつている上になんか吸い込まれてるんだけどおお……！」

「ああ、死んだな。きっと死んだよ……だつて吸い込まれてるもん生きて帰れないよ多分…………ん？待てよ？……これつて悟りじやね？死ぬ寸前に悟りを開くなんて……俺つてスゲエ……」

「つて、あれ？死んでない……みたいだけど、ここ何処だ？」

「まあどこだつていいけどさ、死ぬと思つてたのに生きてたんだ、それだけで儲けもんだったしな

つてか目の前に人いるじゃん全然氣付かなつたよ……」

すっぴえしかもかなりの美少女。こんな娘、リアルに存在したんだな
マンガとかゲームだけだと思ってて「あなたが勇者さまですね！？」
てかこれは本当に現実なのか？もしかしたら死後……

「は？」

何言つちゃてんのこの娘、もしかして電波さんか？
電波さんのか！？

そんなこんなで春原 彰人 職業・高校生の世界救済が始まろうとしている……はず

プロローグ（後書き）

かなり短めですがプロローグってことでおおめに見てください

第一話 勇者様参上ー（前書き）

1ヶ月ぶりの更新です
遅くなつてすみませんでした m(—_—)m

第一話 勇者様参上！

「あなたが勇者様ですね！？」

「は？」

田の前にすゞい美人の電波さんがいた。
つとここまでが前回の展開だ！

……はあ…これは夢だ夢に違いない…………！

つて思いたいが現実逃避はここにしといて…少し落ち着いて状況確認したほうがいいな

「あの～、勇者様？」

とうあえず口は何処なんだ？

穴から室内に落ちたってことは真下…？

いや、常識的に考えてそれは無いな

カーテンで外は分からぬが窓らしき物が有るし

いや、コレだけ電波なんだ…もしかしたらホントに地下に窓をついたのかもしれない

「勇者様つてば…！」

……「ふるわいなあ。

」つむは状況確認で忙しいんだよー。

電波は無視して
確認の続きだ。

とつあえず窓から外を見てみよつ
ここが地上であることを願いながら「いい加減に返事しなさい……
アホ勇者……」

「おっ普通に地上じやん。ちよつと安心

「無視するな……」

マジでつねとい

まあいいこじが地上なのは分かったが外の風景が明らかに日本じゃないんだが……どっちかって言つと中世のローロックって感じじやん……なんかあれ……RPG的な感じがするんだけど
一応確認できるコトはし終わつたけど……無いわあ……

「うつ……ひつぐ……無視……しないでよお……」

え……なんかあの娘泣いてない！？

「ちょつーおい、泣くなよーもつ無視しないからぞー。」

「ホントこ……？」

「ホントだよ　だからもう泣くなつて、つかお前をつめとキヤラ違
いすぎじゃね？」

「そんなこと……グスッ……無いわよ……バカ勇者……」

「つかそもそも…その勇者って何なのさ?」
いきなり連れてこられて『貴方が勇者様ですね!…?』
とか言われても困るし、てかコレ拉致だし…犯罪だし

「アンタ、勇者は勇者よ
あの、魔王を倒す勇者様」

「あつやつぱりやうなのか
なんかお約束つて感じ」

「なに? アンタの世界じや召喚されるのつてよく有る」となの?」

「いや、オレの世界でつてこつよりもオレの世界にある物語の定番
で感じ
つか、『アンタの世界』つてことはやはつぱつ!」はオレのこた世界
とは別モンな訳?」

「なるほどね…多分その通りね、一応《異世界から勇者を探しまし
ょう》つて呪文だつたから」

「が気に食わないけど代替は理解したよ……んで、オレはこれ
からどーすれば良いんだ?」

「私は異常なほど落ち着いてるアンタが気に食わないわ……一応
これから国王に会つてもいい!」とになつてるわ

「一応つて……

まあいこいや。ならその国王様とやらで会つに行きまつか…」

「…………アンタやつぱり落ち着きやすいやない?」

「知るかよそ一ゅう性格なんだから仕方がないだろ?つか行くぞ……えっと……」

「イリア・F・ホールワイトよ」

「長いな……オレは春原 彰人だ……よろしく」

「ふう。悪いヤツじゃ無いみたいだしこれから仲良くなっちゃってこけやうかな……?」

第一話 勇者様参上ー（後書き）

コレからは週一更新を目標します

第一話 あれ? 用つて黄色だよね? (前書き)

目標を達成出来なかつた

無念(つ)

第一話 めれ？……円つて黄色だよね？

「そんじゅ早速国王様とやりに会つてこくか」

「やうね、じやあ行きましょうか」

「ああ、道案内よろしくな」

「あつー・やうやう、移動しながらで悪こねどこの国つてこつかの世界について軽く説明しちわね」

それは助かるな、オレはこの国にや世界か？について何も判らないからな

「頼むよオレも色々と知つておへ必要があるだらうからな」

「まづはこの世界について、まちの世界つていつても別に名前はないんだけどね、あんたの世界もそんな感じでしょ？」

「やうだな……国とかには名前有るけど世界とかにまこれとこつて無いな後は星とかにも名前つててるナビ……円とか……」

あつ円は惑星か

「あつ円ならこの世界にもあるわよ」

「くえやつぱは黄色くて真ん丸なの？」

「何言つてんのよ、円はサファイアブルーでしょ……つてやうか、世界が違つから円の色も違うんだ……」

「そうみたいだな……ことはお互いに同じ言葉でも意味合いとかが違う可能性があるわけだ」

「そうね…………とりあえずそれは置いといて話を戻しましょう
世界の説明の続きだけど、この世界に名前はないそしてこの世界は
今、人間と魔族が争いを起こしている」

「なるほど……つまつその争いを終わらせる為にオレに魔王を倒して
欲しいわけだ」

「そーΦー」と

んで次にこの国についての説明……つて説明する前に着いちやつた

結構脱線したからなあ

「じゃあ続きはまた後で聞くから先に国王様の挨拶しにいってや」

「そうね、行きましょうか

「国王様、イリアです。勇者を連れて参りました！」

• • •

反応おつそ！！

「なにボツーつとしてんの、行くわよ」

「おひめ」

「失礼します」

第一話 あれ? 用つて黄色だよね? (後書き)

次こそは!

次こそは!!

第三回 国語の発達とその歴史の遅れのか…………？（論書）

さうせんでした（――）三

第三話 国王ひたすらあなた話しだすの運びのか……？

「失礼します」

「おーなんかメチャクチャ広いぞ」の部屋
それになんだかす「」に高そうな壇とか像があるし……売つたら一体
どの位するんだろう?

「ちよっとーあんまりキヨロキヨロしないでよ」

「おっ悪い悪い普段こんな高そうなモン見る機会が無いもんだから
れ」

自分で思つていて以上にガン見てたみたいだな

「やべ、まあ無駄に高いものばかりだしね」

・・・

「……なあ、一体じつになつたら始まる」「よく来たな、異界に住
む勇者よ」「うおー」
いきなり喋んなよ、ビックリすんな
「いえいえ、そもそも自分の意思で来んじゃ無いんで」
穴に落ちて氣付いたら此処でしたから

「なに皮肉言つてんのよ

国王様に失礼でしょ」

「構わん

勝手に呼び出して悪かつたなだが、こちらも緊急事態だったのだ」

「ほう、では、私くをこの王室に招いたとこう」とは
その緊急事態についての説明してくれるといつて言ひのかな?」

「つむ、そのつもりだ

では、エレナよ説明を頼む

「え、私がするんですか?」

「当たり前であろう」

「……………では、今のフライラス王国……………とこうよつての世
界の状態と言つた方がいいですかね
この世界は今、カムイ魔王率いる魔族達の攻撃を受けています」

「魔族の侵略か……それは最近からなのか?」
「てかアイツ説明始める前にだるつて言つたぞ
良いのかそれで?」

「いえ、魔族からの攻撃は古くから続いています
ですが問題は……」

「『カムイ』魔王か……」

「ええカムイ魔王は今までの魔王の中でも最強と言つても過言では
ないでしよう

そして何よりカムイ魔王はとても好戦的なんせ前魔王であるミカエルを倒し魔王の座を奪つたのですから

「ええカムイ魔王は今までの魔王の中でも最強と言つても過言では

「なるほど、その好戦的なカムイの指示で魔族の攻撃が激化した……と」

割とゲームとかにありそうな話だな

「その通りです

そして激化した魔族の攻撃の影響で他国との貿易も満足に行えず……

「いつまでもこのままではいる訳にもいかないから現状を打破し現魔王であるカムイを葬れる可能性を持つ勇者を召喚するために『異世界から勇者を探しましょう』《》を使って『私くを呼んだのだな?』

「その通りだ

勇者は「彰人だ」……アキトは中々賢いな

……それでどうだ?」

どうだつてのは

「『勇者として魔王を倒し、この国……いや世界を救ってくれるか?』
といふことか?」

「そうだ

「いいだらう、ただし条件がある」

「ほう、条件とは?」

「なに、簡単なことだ

ただ私の霸道の邪魔をしないといふことだ」

「霸道だと?」

「そう武力により統治を行い頂点に立つための道」

「まあ…良いであろう」

だが何故そのようなことを条件にだした?」

「愚問だな…」

それはオレ、私くが『霸王』だからだよ

第三話 困つて壁をなでるが遅いのか……？（後書き）

今回は伏線を作りました！

第四話 ひさしあわせな日々（前書き）

ノルマクリア

キタ（。。。）――！

第四話　「わあ、まわりやったよ……」

やつひやたよ

あのことは誰にも言わないことにしたんだけじゃなあ……異世界に呼ばれて無意識の内に気が緩んでいたのか？
それになんだか元の世界で『魔王』になつてからずつと感じていた違和感がこつちに来てから無くなつてゐるし
もしかして何か関係あるのか？

……つて考え込んでも答えはでないよな
まあいいさオレ　魔王つてことは紛れもない真実なんだ
それならオレは

「魔王として己の霸道を突き進むだけさ」

「ねえ、その魔王つて一体何なの？」

よし！世界が変わつたからつてオレ自身の生き方を変える必要は無いからな
つてかむしろいつの世界のほうが魔王としては進みやすいやつな
気がするしな

けど取り敢えずは魔王との挨拶も済んだし、呼ばれか理由もハッキリしたし……
寝たいな

つて考え込んでしまつたな

「れからどうするのかイ……電波さんにて確認しなくちゃな
「なあ電波さん、オレはこれからどうすればいい……って
あの娘なんで泣いてんの！？」

……！もしかしてアレか？

オレに話かけてたのにオレは考えこんでたから聞こえなくて
それを無視されると勘違いして泣き出したとか？

「…………」

つたく

どんだけ寂しがりやなんだよ

「泣くなつて、悪かつたよひよつと勧え込んじやつて聞こえてなか
つただけだから
別に無視してたんぢゃないんだつて」

「……ホント？」

「ホントだよ」

なんかすつげえデジャブ

つか電波さんのキャラ安定しねえ

「よかつた、嫌われたのかと思つちやつた……つづく

うう……ちよつと可愛いじやねえか、くそつ

「そんなことねえよ、安心しな」

「うそ、ありがと」

「よし、落ち着いたみたいだし改めて聞くナビ
オレはこれからどうすればいいんだ？」

「あつあつ……一応今日出来たことをもひ無こから用
意した部屋で休んでおひらして構わないわよ」

「明日もなんかあるのか？」

「うん、魔法関係のことと調べたり、武器関係のこととかね
でもちよつと準備に手間取っちゃって……」

「そつか、それなら仕様がないな
それじゃあ今日はもう寝るかな……部屋に案内してくれるか？」

「ええ もううさん、うつりよ

・
・
・

「うん」

「案内あつがとな、それじゃ、おやすみ……電波さん」

「おやすみなれ…………………ってだらが電波さんよ
…………」

「おやつヒー・ニアを開けなセー……」

「五月蠅いなあ、文句なら畠山にやらぬよ

「わつわー・覚えてなれー……」

行つたか

名前忘れたなんて言えないもんなん

また泣き出しそうだしな

まいこいや

取り敢えず今田まむづ寝よう、色々あつて疲れたしな

あつ、電波さんの名前思に出した

そーいやイリアって言つてたな……

いや、でも電波さんのままでいいかその方が反応面白っこ

第四話　「わあ……やめつけたよ……」（後書き）

ノルマクリアした自分にちょっと感動しました

第五話 雷波先生……やべれ(漫畫)

「あなたが二三（一）（一）

第五話 電波さん やべえ

ふあ…………ねむつ

今つて何時くらいなんだ？

そもそも時間つて概念有んのかな……？

無かつたら待ち合わせとかだるいだろうなあ

『明日、太陽が天辺に来た頃にここで待ち合わせね？』
みたいな感じか……？

後で電波さんに聞いてみよ

…………で、もう少一時間電波さん待ちしてゐるんだが…………

「何時になつたら来るんだ……あの電波」

バンシ

「電波じや無いって言つてるでしょ……」

「おおー！電波さんおはよう

「だからーー電波さんじやないって言つてるじゃないーー。」

「え？ひどいやなーーの方がよかつた？」

「うーそういう問題じやないのーー。」

あつ涙田やべえよ

メチャクチャ可愛いんですけど

まさかオレ、電波さんに惚れた……？

いやないない

「電波だぞ？」

『電波さん』だぞ？

あり得ねえだろ？あり得ねえよ
絶対にねえよ「ねえ、どうした

... まざまに

「悪い悪い、ちよつと遅れ」としてた

「もう一ちゃんと聞いてよね！」

たからね、私は電波じゃ無いって言うてるの！分かった！？」

「ああ、はいはい分かりましたよ」

「…………もうつホントに分かってるの？」

「全然？」

卷之三

涙目で唸つてゐる

可愛い・楽しい・止められない=続ける
OK決まりだ!

「で、何の話だつたつけ？」

「だからね、私は電波なんかじやーあつ『ゴメン』聞いてなかつた」

.....

あれ? 反応無し

「おこどりひつた?」

「ひー…………べか」

完全に泣こむやつたよ

「悪かつたよ

今度はちやこと話聞くからね」

「ぐすりもつ……こーもん……わいせつなこもん」

やべつ拗ねちやつたよ

でも……なんかいい……な

「悪かつたつて真面目に聞くからね……機嫌直してられよ……な?」

「む~」

「口メンソ?

「許してあげる

特別だよ……?」

助かつたあ

「ありがと

そんで、なんだつけ?..」

「やうだ!!

戻れるとこだつた!

今すぐ広場に行くわよー。」

はあ?

「何しに元へんだよ?」

「魔法資質を調べんのよー。」

「魔法資質?」

「なんだそりや……?」

第五話 電波さん……やべえ（後書き）

次回はすぐ投稿出来るように頑張ります

第六話 あつ忘れてた……！（前書き）

駄文サー セン

第六話 あつ忘れてた……！

「魔法資質つてのは簡単に言ひとあなたにどれへりこ魔法の才能が有るのかってことよ」

なるほど……つまり

「魔法が使えるのか調べるつてことか」

「まあ、そんな感じね」

「だるい。バス」

なんか疲れたからもう寝たいし……

「ちよつ……何言つてんのよ
もはや待つてんだから」

「ええ……ダルい」

「アナタのせいで遅くなつたんだから急ぎなさいよ」

「いやいや、あれはら絶対にアンタのせいだから……
オレも悪かつたけども……言わないけど

「ほらー行くわよ」

「はいはい

わかつたから、行くぞ」

「あつひよつと待つてよ……」

アナタ場所分かんの?」

そりやあ

「分かるよ

昨日部屋に行く途中にあつたじやん」

「うう…確かにわうなんだけど……気付いてなかつたかも知れない
じやん!」

「オレの観察眼舐めんなよ~」
と、言いつつ先に行くオレまる

「あつーー十待ちなれこよーーー。」

「嫌だ」

・・・・・

着いた

「つか広すぎ

もう電波見えないじやん」

「やつと来ましたか……（遅せーんだよアホ勇者）」

つか…今なんか凄い罵声を言われた気が……

あ…ヒーナさんだ

「スミマセン、アイツが五月蠅くて」

「イリア様ですか……（じやじや馬娘の分際で……だいたい私はこの仕事自体嫌い……）」

あ…あれ？

「あ、あのHレナさん……？」

「ハツ……すいません取り乱してしまって」
あつ眩きが消えた

「いえ、オレの方こそスミマセンでした
変なこと言つちやつたみたいで……」
エレナさん感

「アキトさんは悪くありませんよ
ちよとじゅっ……イリア様のお転婆に疲れてるだけです」

あつ今じゅじゅ馬つて言いかけた

「なるほど」

「つと、この続きはまた後程
本題に入りましょう」

まだ続くのか……？

「あつはー」

『まつ待つひよー』

あつ電波の声

「魔力資質を調べる方法は一種類有ります」

あ

「一つは能力の高い法術師に見て貰う
二つ目は魔力を貴方に流し込むというもの
一つ目は今回は無理なので二つ目でやせらせて貰こます」

そーいや

「オレ魔法使えるや」

「はつ？」

「スミマセン

忘れてました

あつダルそつな顔

「まあ良いです属性は?」

「あつ一応風です」

アレは言わないでおいた方がいいよな

「じゃあ実際に見せてください

それで良いです」

なんかエレナさん怖いです

「は...はい

じゃあやりますね

...ふう

『 いけ 』

まあただの風だけどね
つてあれ…？

「ソノにこるのつて…」

「電波だ」

「電波じゃなーい！ー！」

あつ怒りながら翔んでつた

た～まや～

第六話 あつ忘れてた……！（後書き）

頑張ります！！

人物紹介（前書き）

今回は人物紹介のみです

人物紹介

- 春原 彰人 Sunohara Akitō
・性格 冷静、ドS（多分）・やる気少なめ
・年齢 16
・一人称 オレ
・好きなもの 猫、平穏、チェス、カワイイもの
・嫌いなもの 話を聞かない奴、猫嫌い、酸っぱいもの
普通に高校生をしていたはずがいきなり勇者として召喚されてしまつた面倒臭がりの主人公

Royal Road mode

- ・性格 冷徹
 - ・一人称 我
 - ・好きなもの 猫、戦闘、霸道
 - ・嫌いなもの 霸道を妨げるもの
- あること（本編でいつか明かされる……はず）を切っ掛けに目覚めた霸王としての状態

イリア・F・エールライト Ilia・F・Yellight

- ・性格 感情豊か 電波
- ・年齢 15
 - ・一人称 私
 - ・好きなもの 動物、物分りのいい人、甘いもの
 - ・嫌いなもの カワイイもの嫌い、うるさい人、辛いもの
- 電波な国王の一人娘。アイリさんと彰人に電波、じゃじゃ馬と言われるのを気にしている

エレナ・A・トリア Elena・A・Thoria

- ・ 性格 クール
- ・ 年齢 22
- ・ 一人称 私 > ワタクシ <
- ・ 好きなもの 休み・昼寝・さぼり
- ・ 嫌いなもの 仕事
- ・ 面倒臭がりな国王の秘書。
- 彰人と気が合うようだ

カリス・M・エールライト C a r i s · M · Y e l l i g h t

- ・ 性格 のんびり
- ・ 年齢 56
- ・ 一人称 我
- ・ 好きなもの イリア・お風呂
- ・ 嫌いなもの イリアの嫌いなもの
- 国王。おそらくもうほとんど出番は無いだろう

人物紹介（後書き）

この他に気になる点がありましたら感想などに書いて頂けると自分も返答が出来ると思います

P・S・キャラ名に一部ミスがありました
アイリ ハレナ
でした

大変申し訳有りませんでしたm(ーー)m

ニードル1000記念『イリアのバレンタイン』 〈前編〉（前書き）

後半がもう意味ないですw

ヒーラー1000記念『イリアのバレンタイン』 〈前編〉

【H-L-I-A - Side】

「ばれん……たい…ん?」

「ああ、ロッチにはバレンタインの習慣がないのか……」

「う~何よ! 勝ち誇った顔しちゃってや~」

そつちの世界の文化なんて私が知ってるわけないじゃない!」

「それで! 一体! どんなモノなの!」

「ん? ああ、簡単に言うと 決まった日に好きな異性にお菓子を渡して好きですって言う行事 だよ
あつ因にお菓子ってのは基本的にチョコでわざわざ仲の良い異性に対しての義理チョコってのもある

「へ~」

……つて私にその話をすると「ひとま

もししかして……

「欲しいの……? チョコ」

「なつ! ……んんん? 分けないだろ! ……

このアホ電波!」

なつ

「電波じゃないばー! ……つてどう行くのよ! ……

アキト!」

ああ行つちやつた……

全くアキトは素直じゃないわねえ

まあいいわ！アキトのために最ツ高のチワコレートを作つてあげようじゃないの…！

もつもちろん義理よ！義理…！

でもチワコレート……どうやって作るのかしり…？

まあいいや。

とりあえず厨房に行きましょうー

先ずはそれからよー

・・・・・

「ひ…姫様！お待ちください！

国王から厨房には姫様を入れないよしどとの命が…！

「五月蠅いわね！

良いから出て行きなさいー許可なら後で取るわよ

ギギイツバタンツ！

「な…！お待ちください！

姫様！姫様待つてください！いやマジで…！

本当にヤバイから！姫様…！」

「ふう…全く五月蠅かつたわ

よし！じゃあ早速作りましょう…！

なんか丁度お菓子作る用意見たいのされてるし

本まであるし

A 「おい！どうする？姫様が厨房に入っちゃったぞ」
B 「くそっ！」のままじゃ電波な地獄じごくが再来するぞ……』

全國の被験者は誰なのしかし、

田 やはり国王様じゃないのか?

アーリーはおそれなく、この被害者に

シテ興行様のもの

確かに今回の件は勇者様が原因でしょうからね』

田・まさか・チミ・ケリギ(ハタ・多め)が食へたし」なんて言い

アーティスト一覧

ドッカーン！！

『『『ああ……もうおしまいだ（よ）』』』

「あら？ また鍋が勝手に爆発しちやつた
どうしてだろ？」

まあいいわ後で三人には謝つておきましょう
仕様がないからまた初めから作りましょう！

よしー頑張るわよー

「えりと…まあはハチヨ ハーネートを小さく刻みまわ うと」

ズンシドゴッバキッ

よしつー

「次は…ハボウルに刻んだチヨ ハーネートを入れ、そこに沸騰させた生クリームを少しずつ加えながら、泡だて器で混ぜていきます。溶けにくい場合は、45 のお湯で湯せんにかけながらでも、混ぜていれましょー……まあなんとかなるでしょーー」

びけや、べけよひぐけやつ

なんか飛散つちやつた

「よしぬ次！ハチヨ ハと生クリームがしつかり混ぜ合わせた後、グラムマルニヒ（リキュール）を加えてさらじ、混ぜ合わせます。く…ね

お酒だけじゃつまらないいろいろ入れけやいましょー
きつとその方がおいしいわ！」

ボロラハクゴボッ

「もう少しで完成ねハバットにラップを敷いておき、そこに生クリームヒグラムマルニヒ（リキュール）が混ざり合つたチヨ ハーネートを流し込み、で2~3時間くらい冷やして固めます。くかよしー魔法で一気にやつちやこましょー
えいっー！」

カキンッ

・

・・・
A『なあ、やつきから明らかに料理で発せられるはずのない音がしてるんだが』

B『いや？俺には全然聞こえないけど？ハツハツハツ』

C『ちょっとボランしつかりしなさい！現実を見るのよーーー』

『おいおいチエルシー俺はなんともないぞ？』

A『チエルシー、もうボランを休ませてやれ疲れてるんだよ』

『でもアラン……！』

・・・・

まあなんとかなりそうね

「最後は……」バットから出し、好きな形・大きさに切り分け、ココアをまぶして出来上がりです。

＜か勿論オリジナルの形よね、やつぱり

「完成～！」

よし、後とはコレをアキトに渡すだけね

ギギッ

『姫様！――』

「なつ何よやんなに慌てて」

『厨房は？厨房は無事ですか！？』

あつ謝つておかなきゃ

「ゴメンナサイ鍋を1~3個爆発させちゃったわ

あ、あと汚しちゃったかも…」

『なつ…』

『う…嘘だろ…？』

『姫様が鍋を壊しただけ？』

「何よその言い方…」

『『『あつすみませんでした』』』

「まあいいや

今は忙しいからお説教はまた今度ネ！」

早くアキトに渡しに行きましょう

「アキト様なら中庭ですよ

「わうなんだ

ありがとうチヨルシー！」

・・・・・

あついた！

「アキト…… わせませさんよ…… じゅじゅ馬娘…… 」

えつ？

「H…… Hレナ…… ?

ビツして貴女が…… 」

「じゃじゃ馬、それを彼に渡すことだけは絶対に許さない」

なつ

「どう…… して…… ？」

私はただ彼にチョコを…… ！」

「ただのチョコなら構いません
でもそれは貴女の手作りでしょ？」

「何よーまるでそれじゃ私のチョコが毒みたいじゃない

「その通りですよ」

ひつ 酷い！

「お~い

わっかかるで何謔いでんだ？」

「あつアキト（様）！」

「アキト様、来てはなつません

「アキト、これ作ったの！」

「ん？ 何、チョコ？」

「せうよー。わざわざ作つてあげたんだから感謝しなさい。」
やつた！なんとか渡せたわ

「ああ、ハイハイ一応貰つよ」

「早く食べなセー」

早く早く

「はーはー」

「なつアキト様それを食べてはダメです！」

「えつ？」モグモグ

美味しいに決まってるけど

「ねえ、美味しい？」

「ん~そつよ~なつ~ウツ（なんだ…コレ…）」

あつあれ？

「ど…どひしたの？」

「アッアキト様！？」

「いや、あれ？なんだこれ？毒？つかもつ限界？」

なあ！

「違ひわよ、チヨコレートですー」

「アキト様限界つてー!?

「取り敢えず

……↗破壊力的な意味でく最…高…だつた…ぜ…?

お前の……チ『』……『』

「アキト?」

あつあれ?

「だから……言ったのに……」

そ、そんなー!

「ア…アキト…?」

アキト
「…!…!…!」

（←）

ヒーリー1000記念『イリアのバレンタイン』 〈前編〉（後書き）

もし気が向いたら後半も修正します。ww

マーク1000記念『イリアのバレンタイン』 〈後編〉（前書き）

駄文ですが読んでくだされば幸いです

ヒーラー1000記念『イリアのバレンタイン』<後編>

「ア...アキト...?」
アキト 「!—！」

・・・・・
2日後

ん朝か

あれ？オレベットに入った記憶無いんだけど
つてそいやなんか凄いモノを食べた気が

アツ！

そうだよ！確か電波のチョコを食べたら急に体がおかしくなつて倒
れたんだ！

あの電波……まさかオレを殺す気だつたのか…？いや…電波の料理
が殺人的に不味かつただけだな…うん
だからエレナさんもあんなに必死に止めてたんだな…納得納得

よし納得したところでちょっと電波と

オハナシしなきやナ…？ハハハ…ハハハハハハ！

まあ嬉しかったけどね…？

・・・

・

見つからない
電波は何処だ…

いつそのこと裏技使うか…？（七話で使います）
あつ！あそこにエレナさんいるじゃん
よし！先にエレナさんに聞いてみるか

「エレナさ～ん！」

「アキト様！

もう大丈夫なんですか？」

「ん？ああ平氣だよでもちょっと電波とオハナシがしたくてサ…ハ
ハハ」

「そ…そですか…

じゃ…失礼、イリア様なら中庭にいましたよ

「そ…なんですか

助かりました」

犯人は現場戻るってか…？

「では私は（だるい）仕事がありますので…失礼します」

今だるいって言つてた絶対に言つてた

「あつはいご苦労様です」

んじや

早速中庭に行きますかね

・

電波はいるかな？

おつい……たけど……なんで電波は雪ダルマ作つてんだ…？

「おい、アホ娘」

「え……？ アキト？」

起きたんだ！ 2日も寝たきりだったから心配したよ～」

「イツ全く反省してないな…？」

てかオレ2日も寝てたのか… 1日だと思つてた

…まあいい

「ハハハ… ちょっとオハナシしようか」

「え？ な… なに… かな？」

スウウウ

「あんな凶器人に食わせんじゃ ねえアホ電波！…！」

…

「だ… 誰が電波よ！」

…アホではあるのか？

「お前だバカヤロウ！」

なにしたら料理で人を2日も寝込ませられんだ…！」

「仕様がないじゃない！ チョコレート作りなんて初めてだつたんだから…！」

「んなコト知るか！」

つかお前味見してないだろ？」

「…………しましたあ」

おいおい

「コッチ見て言えコッチ見て

「'うう……

な……なによ……良いじゃ……
一生懸命作つたのよ?……グスッ
アキトのためにつて想つて頑張つたのに……そこまで言わなくでも……
ズズッ」

泣かせちゃつたよ……

……言い過ぎちゃつたかな……?

「ああもう

悪かつたよ

オレも言い過ぎた
『ermenな……?』

「ううん……私は『ermen』
美味しいの作れなくて」

「そんなこときこすんな

正直言つて

スッゲ 嬉しかつたよ『イリア』のチョコ

ありがとな

「どーいたしまして…………って……ア……アキト今私のコト

「イリアって呼んでくれた……？」

あひせべー！

「さあね電波ちゃんは電波ちゃんだろ？」

ପ୍ରକାଶନ କରିବାରେ

「…」答えるなよ…！」

「やだねっ！」

「ハラス！」

ſiſins

マーク1000記念『イリアのバレンタイン』 〈後編〉（後書き）

続き……書かなきやな

第七話 それって……多くね？（前書き）

帰ってきたよーー！

…多分

第七話 それって……多くね？

「お~い、大丈夫か~？」

電波のやつ良い感じに翔んでいつよな
つかエレナさんも探すの手伝ってくれよ

「嫌ですよ

一人で探してください」

……ちょっと……なんで聞こえるんですか……エレナさん……

「はあい

なんか一発で呼び出す方法は無いのか……あつ！

「電波ちゃ～～～ん！」

『電波じゃな～～い！』

おおー・マジで出てきたぞ！

凄いスピードでコツチ来てるし……

つかどんだけ吹っ飛んでんだよアイツ……翔ばしたのオレなんだ
けどさ……うん……なんか…スマセんでした……ホントに

「電波じゃないって言つてるでしょ……」

はつー？ いつの間にか田の前にいるやー

冗談だろ？ 一キロはあつたはずだぞ！ 一〇秒とかで来れる距離じゃ
ないぞ！

一体どうやったんだ？ まさか熱血バトル漫画でよく出る瞬動か！？
いや、電波がそんな凄い技を出来るとは思え！ 「あつと聞いてる

の…」

「え？ あつ悪い聞いてなかつた
メツチャ考え込んでたわスンマセソ

「ちよ…一ちゃんと聞きなきなことよー！」

「「ロメンロメン、 こんど? 何だつナ?」

「だ・か・らー私は電波なんかじやないって言つてゐのー.
だいたいね！ いきなり吹き飛ばすつて一体なんのつもつよーーー！」

あ、いや

「マジ…

スンマセソ

まさかあそこには電波がいると思つてなくて……

あ……やべっさん付け忘れた…

「えついや…あ、あの…

何か私も言こ過ぎたみたいで……その…「めんなそこの

ん？さん付け処か電波つて言つたのも分かつてない……？

ラッキー

「まあ取り合えずこの話はいい今までにしてたら
エレナさんの所に戻るわ」

「やうね。行きましょうか

よつしゃーー誤魔化せたーー！」

「エレナさん
見つけたぞ！」

「」苦労様です

それでは（面倒なので）いきなり本題に入りますが…
実はさつきアキトさんに魔法を使用していただいた際に魔力量を測
らせていただいたのですが……」

「？エレナどうしたの？
何か問題でもあつたの？」

問題？それは嫌だなあ
何だか面倒くさそうだし……

「いえ、問題は無かつたのですが、数値が桁外れすぎていて……」

「魔力量つて数値で出るのか？」

「そうよ。基本的には

一般人で“10”一般的な魔法使いで“50”王宮で働いている優
秀な魔法使い、大体は神官つて呼んでるんだけど、その神官で“1
50”って感じよ

なんかロープレみたいだな
MP的な
「因みに一人の魔力量は？」

「私は254でイリア様は317ですね

ついでに先ほどの説明の補足をさせていただくと…

魔力量というのは、基本的には生まれつきのものになります。

一種の才能ですね」

「えそなんだ

「鍛えたりして増やせないのか?」

「多少は可能ですがそれでも20上がれば良い方ですね」

ふーん

「で、一体アキトの魔力量はいくつだったの エレナ?」

「それが……1544です……」

「「……え?」「

「ですから、1544です。

神官10人分ですね

因みに前魔王は600前後だつたと言われています」

マジかよ、魔力は抑えてたつもりなんだが……抑えてたのも測られたのか?

それでも多いが……

「まつまといいわ

一応調べ終わつたんだし、国王様に報告しまじょ
これからのことも決めなきやだしね」

え?
これからのことって何
...?
?

第七話 それって……多くね？（後書き）

パソコンが壊れて意氣消沈してたのを何とか持ち直して書き上げました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6846o/>

霸道を進みし勇者の世界救済

2011年8月23日07時04分発行